
開かずの間

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

開かずの間

【著者名】

ZZマーク

ロースト

【あらすじ】

なんとなく書いてみました。

感情に迫る、現代心理学！嘘ですごめんなさい。本に影響されただけです。はい。

開かずの間

心を部屋と考えるとするなら、僕には開かずの間とも言つべき扉がある。

それがなんなのか、僕は知らない。部屋の奥に何があるのか分からぬ。

鍵はかかるだらうか、かかるでないだらうか、それすらもわからない。

それは禁忌の扉。決して開けてはいけない、感情の扉。
自分で開けることは叶わず、なのに、突発的に容易く開く扉である。

それを完全制御するものはない。いや、いるはずがないのだ。
本来、人間とはそのようにつくられている。

そして、この扉は感情の扉の中でも、本来、本能に近いものを司る扉である。

そう、本来は。

本来的にはその扉を故意に開くことは出来ない。が、現代の技術力では、それすら操れる。

いや、技術力といいうのは正確ではない。

どちらかといえば、言霊による、相手の感情の誘導といいつのが相応しいように思われる。

しかし、相手の感情の誘導にしたつて、必ずしも思ったよういくわけではない。

それは当たり前だ。個人というものがあるのだから、人によって、

言靈による影響も違つ。

相手がどう受け取るかは多少差異が出てしまう。

その差異を最小限に失くすとしたら、その人物について詳しく知る必要がある。

その上、注意深く感情の変化を読み取らなければならない。

だが、それにしたって、自身でもわからないような感情を他人がわかるはずもない。

察することは出来ても、詳細や、その奥に隠された感情まで読み取ることは不可能だ。

そう、限りなく可能に近くても、可能ではなく、不可能であるのだ。

これは仮定の話で、実際に起こつたか、起じるかは、わからない。

だが、問題定義するとしたら、の話だ。

もし、もし、完全なまでに他人の感情がわかつてしまふ人がいたら。

もし、もし、完全なまでに自分の感情に制御と偽りができる人がいたら。

そしてもし、そんな二人がどこかで、いつか、出会つてしまつたならば、

それは、どういつ事態を引き起しゆのだらうか。

たとえばそれは、世界を巻き込んだ、大事になつてしまつとか。たとえばそれは、いつまでも平行線な言い合いになつてしまつとか。

たとえばそれは、無意味で空虚な会話をただ純粹に楽しんでしまうとか。

たとえばそれは、不毛でしかなく、痛々しさを感じるような決定だつたり。

たとえばその話が、もし、現実になってしまったなら、そしてあなたが、その当事者の一人だったなら、どうしますか。

それは、可哀想なことだと思いますか。

自分の感情を偽ることしか出来なくて、本心を明かせない。他人に知つてもらえない。

自分の悲しさも、楽しさも、辛さも、何もかもを偽るしか出来なくて、余計に偽ることをしてしまう。

相手の感情が伝わってしまって、自分は相手の気持ちを知つてしまつ。相手が自分に何を思つているか、何を考えているか、わかつてしまつ。

自分に対する絶対的な信頼感だつたり、裏切りを含む感情だつたり、悲しみを伴つていたりするのを、故意ではなく、わかってしまう。

そんな二人が会つたなら、どう思う？

自分の偽った感情を、偽りだと見抜かれて、見透かされて、居心地悪くなるだろう。

それは皆が思うこと。すごいと思っても、それは一時に限る。すべてがすべて見透かされるのは気分が悪い。だからといって、都合のいいものだけ見透かすというのも無理な話だ。しかも、自分の感情を制御し、偽れるなら、余計に嫌だろう。自分の嘘が、通じない。そして見透かすほうも、相手が感情を偽るならば、その感情は嘘なのだから、見透かすわけではないけれど、いつも『嘘をつかれている』とわかっている状態なのだ。気分がいいわけがない。そして、見透かすのを望んでいたわけではないけれど、見えていたものが、

わかつていたものが、見えなくなつたり、わからなくなつたりしたら、不安になる。

それならば一人とも躍起になるのは当然の事といえよ。それは必然である。

つまり、一人が出会つた時点で、それは必然であり、こつなることは予想できる、当然決まつていたことである。

ならば、この後、二人がどうなるのか。

それは予想できるだらうか。

それは否。

運命なんてものは決まっていないし、

これまた個人、どう思つかも、どう行動するかも、予測不能である。

それは感情によつて、未来は決まるからである。

結局、本当に感情を制御する「」とも、偽る「」とも出来ないのである。

結局、本当に感情を理解する「」とも、わかる「」とも出来ないのである。

それが、結局のところの終焉であり、物語の最後である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2806m/>

開かずの間

2011年1月28日08時24分発行